兼好の文学思想に関する一考察
－ 徒然草を中心に －

張　晋　洙*

〈目　次〉

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. 本　論
1. 兼好と日本中世の時代的背景
2. 兼好の 人生観
3. 兼好の 無常観
(A) 詠嘆的 無常観
(B) 自覚的 無常観
4. 兼好の自然観
(A) 自然の理致と美
(B) 四季節の美
5. 和歌的な要素と文学思想
Ⅲ. 結　論
参考文献

Ⅰ. 序　論

『徒然草』は中世日本の兼好が書いた隨筆で、鎌倉末期のもっとも優秀な作品の一つである。

作家兼好は彼の生涯においてニつの作品のみを著述したが、始めの作品が和歌集である『兼好家集』である。それからまもなくニ册243段の構成で、『徒然草』というの隨筆集を出刊した。これらの作品は中世日本の和歌・隨筆の独歩的作品で、これから多くの読者に読まれている。

本稿では兼好の『徒然草』を対象にして、兼好の文学思想に対して考察することをこの論文の目的にした。

また、その主な内容としては、先ず日本中世の時代的背景が日本古典文学『徒然草』にどのような影響を及ぼしかを調べることにした。それから『徒然草』に現れた兼好の人生経歴を見ながら、宗教的で哲学的でもある兼好の人生観を探究し、「沙弥」である彼の根本思想を調べることにする。

また、『方丈記』[1]の作者鴨長明[2]の現世を否定する詠嘆的無常観とは異なる無常

＊本稿は 日本学報 第29輯(韓国日本学会 1992. 11)に発表されたものである。
＊韓国海洋大学校　教授(日文学専攻)
1) 1212年鴨長明が著述した。日本中世の暗黒な社会を書いた作品である。
2) 鴨長明は1155年, 長継の次男として生まれた。『方文記』を58才のごろ出刊した。その後1216年世を去るのである。

が、人生の避けることができない事実だと認識した兼好の自覚的無常観が、日本文学により大きな成果をもたらした点を論じようとする。

それから“万物は常に流転する”という自然観を根抵にした文学作品である『徒然草』に現れた作者自身の人生に関した思想的な面と自然的な面を観察して見ようとする。

それで自然文学という『徒然草』で「あはれ」[3]と「をかし」の情趣がある自然観を中心とした四季節の美と、月・花・風・水のような自然を観察したい。

最後に、和歌の「四天王」と言う有数な歌人の一人である兼好が書いた『徒然草』に現れた和歌的要素を探って兼好の文学的思想研究と『徒然草』作品の中に表現された和歌との関係を調べて見たい。

特に本稿では兼好の『徒然草』に現れた文学的な思想に焦点を合わせた。そして兼好の中心思想である道徳性の追求と哲学的な面を新たに照明し、現代人として彼の思想と文学の方向を探すのに筆者は努力した。

II. 本　論

1. 兼好と日本中世の時代的背景

兼好が生存した時代は大抵鎌倉時代末期から南北朝初期、即ち弘安6年(1283)までで彼は正平17年(1362), 68才まで生きたと知られている。

藤原政権400余年の間栄華を受けた平安王朝は、保元・平治の乱[4]以後源頼朝によって討伐された。源頼朝[5]は鎌倉に幕府を設置して本格的に鎌倉幕府の時代を開いた。これが建久3年(1192)のことである。また、この時から北条一族が滅亡する元弘3年(1333)までの約150余年の時代を鎌倉時代と言う。

この時代は天皇を中心とする公家階級から武士階級に政権を掌握しようとした時代である。が、初期には全面的な掌握と言うより武士は鎌倉に、公卿は京都に政権を擁立して対立していた。しかし平素反幕府的であった後鳥羽院が承久3年(12

3) 李榮九訳, 日本文学概論, 教学研究社, 1982. P.34.
4) 倉田康夫編, 日本史要説, 教学研究社, 1981.2. P.112.
5) 平氏家を討伐して, 征夷大將軍に1192年に任命された。彼は鎌倉幕府を創設した。

21)に起こした承久の乱で破れ、後鳥羽上皇は隠岐に、順徳天皇は仕渡に、土御門上皇は土仕に島流しされた。[6]

これによって公家勢力は極度に衰弱され、幕府の勢力は著しく強化した。

この時から政治は幕府がある鎌倉で行なわれ、京都の文化圏を守って来た公家の社会はだんだん崩れ始めた。以後鎌倉幕府を支持した御歌人制度[7]が意味を失った。この時北条氏の執権体制が強化しながら鎌倉幕府は徐々に崩壊され、足利尊氏に依って室町幕府が誕生する。その間朝廷内部は吉野と京都と対立し、武士も南・北両派に分かれて争った。これが「南・北の動乱」[8]である。

乱後約60年ぐらいが室町幕府の安定期にだったが、室町幕府の基礎であった守護大名の聯合政権が、下剋上の風潮に依り大部分没落し、「應仁の乱」[9]で戦国期に入りながら室町幕府も崩壊された。

鎌倉幕府成立以後から室町幕府が滅亡するこの時期(1603)までを日本の中世と呼ぶ。言い替えれば、文学史では鎌倉・室町両時代が日本の中世なのである。この時代は、つづいての戦乱で社会が乱れ、百姓の生活は不安な世情の中に落ち込んで、末世思想と無常観にとらわれて入道する人が増えた。特に西行や長明・大原の三寂(寂超・寂然・寂念三兄弟)と歌林苑の俊恵、二条家歌壇の俊成等は 「世捨て人」で有名であった。

この時期の日本文学史を簡単に調べて見れば、建仁元年和歌所が設置され、元久2年(1205) 『新吉今和歌集』が撰集された。後鳥羽院の俊成は歌壇の中心的存在であって、彼は「幽玄」[10]・「余情」の美的理念を定立させた。また, この時期に爲世・爲兼・爲相の二条・京極・冷泉家の三家対立があった。後に爲世の二条家と爲兼の京極家の両家が対立するようになった。この時皇室に起った大覚寺・持明院両統の対立で歌壇は分裂した。

それでは次にこのような歴史的・時代的背景の中で違大な兼好はどう対處して来たかを周囲環境と思想に関して調べて見ることにする。先ず兼好の家系を調べて見ると、彼の祖父兼名は仁治・寛元の時から関東で神道に従事した人で京都と関

6) 倉田康夫編, 前掲書, P.120.
7) 一般的に御家人制度と言うのは御恩奉公による封建的主徒関係を言う。
8) 倉田康夫編, 前掲書, P.108.
9) 倉田康夫編, 前掲書, P.150.
10) 李榮九訳, 日本文學概論, 教学研究社, 1982. P. 37.

東とを往来しながら鎌倉文化を地方に傳播した宗教人であった。そして彼の父親兼顕は治部少輔と言う低い官吏の身分で、兄の慈遍は大僧正までの人で次の兄兼雄は民部大輔だった。このように代代神官の家門で生まれた兼好は蔵人・左兵衛左で六位以下の地下人と言う低い身分だった。しかし彼は後二条天皇の下で蔵人に仕えている間多くの貴族と臣下と接觸して知識を得た。

それで彼は儒教・老荘思想にも造詣が深く有識故実[11]に明るいと認定されていた。

また、特に「頓阿・淨弁・慶運」等と共に「和歌四天王」に知らされる程, 和歌の歌人と認定されていた。

兼好は27才に出家して37才まで約10余年間は隱遁生活をしたため作家活動もほとんどしなかつた。しかし彼は40代から50代まで活発な作家活動をした。

一方、彼の父親兼顕は、後宇多天皇の譲位後も神祇官を継続務めた。この時邦良親王の父君の後二条帝(邦治親王)は母親の西華門院[12]の実家(掘川家)で育った。当時後宇多天皇の子の邦治親王(後二条帝)を保護し、助ける役割に、苦い少年の兼好を起用した。

この時, 拙川具守が兼好を起用したのは、その兄兼雄が北条貞顕の重臣だったためである。具守の背後には平家の一門だった金沢北条の一家が連結していたと推測される。兼好は 「拙川家の家司」という大覺寺統の後二条帝を仕えた。このようないきさつで、兼好は邦良親王と掘川具守と特別な関係にあったことはまちがいない。彼が35才, 文保元年(1317)には延政門院一条[13]と「具守の一週忌」の墓参拜であってお互いに歌を交した。

ところで後二条天皇の下で仕えた兼好は後二条天皇の崩御で自分の将来に対して苦閔するようになった。

しかし長い歳月貴族的環境に育った兼好は貴族文化に対する憧憬心で一杯だったと思われる。それで彼は古代からつづいた貴族文化の代表的文学の「和歌」に対して, 熱情を抱いていたのかと思われる。即ち, 和歌は彼の低い身分をわすれさせ, 高い身分の「よき人」に上昇したい欲望を充足してくれたということができる。それから彼は歌人として修業も熱心にした。また、半僧半俗の「沙弥」として生活を

---

11) 宮中武家等の儀札, 官職, 法令, 風俗等に関する慣例を調査する学問.

12) 風巻景次郎, 家司兼好の社会圏, P.193.

13) 延政門院一条は 兼好の女の友達。延政門院一条は弘安 (1284) 7年出生, 元弘3年(1338) 死亡。

しながら俗世と連結する一つの手段として利用もした。

兼好の和歌の師範は爲世だったが、爲世が撰進した『続千載集』[14]に兼好の和歌が一首入集してから彼は正式に歌人になった。その後兼好は爲世から多くの影響を受けるようになる。1316年『和歌庭訓』を著述した爲世はすでに77才だった。彼の長男爲道は若くして死に、爲藤も元亨4年(1324)に世を去った。孫の爲政とはお互いに意見が合わなかった。このため危機感を感じていた爲世は『古今集』の家説等を一部隠者歌人の門下生に伝えた[15]。それが「和歌四天王」であり、この時兼好も参加することができた。

特に「頓阿・浄弁・慶運・兼好」の「和歌四天王」はその当時の二条家壇の危機を救った。

兼好は隠遁が終った後30代後半から40代までは『古今集』を尊重する二条家歌人として活動したと思われる。兼好は哲学者であり、芸術家として活動しながら、和家集である『兼好家集』を始めて出刊した。この作品の内容は王朝文化の枠の中で、特に二条派歌学の歌人としての姿勢を含んでいる。その後彼は苦悩とともに中世の無常観を一層昇華しながら、ただ二編の作品中、二番目の作品の隨筆集 『徒然草』を出刊するようになる。この作品集には始めの作品集で見られる感傷的な姿はほとんど見られない。代わりに、中世という混乱時代を生きる方法に対して眞に苦悶し、また無常の中で自由を求めようとする心の姿勢を見せている。

それから兼好は暗い中世の中で「さび」という美の存在を知らせている。中世に書いた 隨筆集『徒然草』は自由を求めるために絶えず努力する兼好の思想と自己反省を形象化した自照文学[16]と言うことができ、作歌の鋭い感情が見あげられる独特な隨筆文學と言える。

2. 兼好の人生観

『徒然草』に表われた“兼好の人生観”[17]は宗教的ばかりでなく哲学的でもある。

---

14) 爲世が撰進したもので兼好の歌一首が入っている。『続千載集』は20巻で歌は 2,148首が 入っている。

15) 日本文学全史. (3) 中世編. P.316.

16) 作者が 人生に対する思想的な面を表現する形式で自己反省を形象化した文學を言う。

17) 張晋洙, 海大語文研究, 第1巻, pp37－54, 兼好の人生観の部分を補充した。

しかし兼好は宗教人でも哲学者でもなかった。兼好の特性は宗教家的・哲学者的性格の所有者であるにもかかわらず、かえって文人的芸術家的であったことにある。言いかえれば、兼好は哲学的にも論理的にも人生を解明しようともしなかったし、また宗教的境地に心酔し、人生の救援を得ようともしなかった。『徒然草』で解れた内容は人生に対する仏教教理に関することでその内容に深く有益な教訓が多く出ている。そして兼好の宗教的で、哲学的で芸術的な性格は人生のいろいろな姿を含んでおり、智恵でみなぎっている。

それでは『徒然草』作品の中に含まれている豊富な智恵と兼好の深い人生観に観して考察して見ることにする。中世時代の文芸は一般に暗くて、ゆううつな人生観が基底をなしていた。しかし『徒然草』ではゆううつな姿は見られなく、また無常観を詳しく説明してはいるが厭世的で、悲観的な姿は少しもない。兼好は『徒然草』のいろいろな文章で表見したように急速に近づく死への自覚を悟らせようとする文章を何度も繰り返している。例えば「人はただ、無常の身にせまりぬるまじきなり。」[18] (第49段)〔人は、ただ、死がその身に追っていることをしっかりと心得で、わずかの間も忘れてはならないのである〕、また、「もし人事たりて、我が命,明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間, 何事をか頼み、何事をか営まん。我らが生ける今日の日, 何ぞその時時節に異ならん。」[19] (第108段)〔もしある人が来てお前の生命は、明日なくなるに違いないと宣告したとしたら、その時は日の暮れるまで、何を頼み、何を骨折ってやろうとするか。我々の生きている今日という日は、明日死ぬといわれその時を待っている時とどこが違うだろうか。〕、また、「貪る事のやまざるは、命ををふる大事、今ここにきれりと、たしかにしらざればなり。」[20] (第134段)〔果てない欲望が起きる理由は、命が尽きる一大事、即ち死が目前にあるということをはっきり知らないからである。〕、また、「死期はついでをまたず。 死は前よりしも来たらず、 かねてうしろに追れり。人皆、死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来たる。」[21] (第155段)〔人間と死というものには順序がない。死は前方からやってくるとは限

18) 安良岡康, 徒然草全注釈上巻, 角川書店, 1991. P.227.
19) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.465.
20) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.556.
21) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.118.

しながら俗世と連結する一つの手段として利用もした。

兼好の和歌の師範は爲世だったが、爲世が撰進した『続千載集』[14]に兼好の和歌が一首入集してから彼は正式に歌人になった。その後兼好は爲世から多くの影響を受けるようになる。1316年『和歌庭訓』を著述した爲世はすでに77才だった。彼の長男爲道は若くして死に、爲藤も元亨4年(1324)に世を去った。孫の爲政とはお互いに意見が合わなかった。このため危機感を感じていた爲世は『古今集』の家説等を一部隠者歌人の門下生に伝えた[15]。それが「和歌四天王」であり、この時兼好も参加することができた。

特に「頓阿・浄弁・慶運・兼好」の「和歌四天王」はその当時の二条家壇の危機を救った。

兼好は隠遁が終った後30代後半から40代までは『古今集』を尊重する二条家歌人として活動したと思われる。兼好は哲学者であり、芸術家として活動しながら、和家集である『兼好家集』を始めて出刊した。この作品の内容は王朝文化の枠の中で、特に二条派歌学の歌人としての姿勢を含んでいる。その後彼は苦悩とともに中世の無常観を一層昇華しながら、ただ二編の作品中、二番目の作品の隨筆集 『徒然草』を出刊するようになる。この作品集には始めの作品集で見られる感傷的な姿はほとんど見られない。代わりに、中世という混乱時代を生きる方法に対して眞に苦悶し、また無常の中で自由を求めようとする心の姿勢を見せている。

それから兼好は暗い中世の中で「さび」という美の存在を知らせている。中世に書いた 隨筆集『徒然草』は自由を求めるために絶えず努力する兼好の思想と自己反省を形象化した自照文学[16]と言うことができ、作歌の鋭い感情が見あげられる独特な隨筆文學と言える。

2. 兼好の人生観

『徒然草』に表われた“兼好の人生観”[17]は宗教的ばかりでなく哲学的でもある。

---

14) 爲世が撰進したもので兼好の歌一首が入っている。『続千載集』は20巻で歌は 2,148首が 入っている。

15) 日本文学全史. (3) 中世編. P.316.

16) 作者が 人生に対する思想的な面を表現する形式で自己反省を形象化した文學を言う。

17) 張晋洙, 海大語文研究, 第1巻, pp37－54, 兼好の人生観の部分を補充した。

しかし兼好は宗教人でも哲学者でもなかった。兼好の特性は宗教家的・哲学者的性格の所有者であるにもかかわらず、かえって文人的芸術家的であったことにある。言いかえれば、兼好は哲学的にも論理的にも人生を解明しようともしなかったし、また宗教的境地に心酔し、人生の救援を得ようともしなかった。『徒然草』で解れた内容は人生に対する仏教教理に関することでその内容に深く有益な教訓が多く出ている。そして兼好の宗教的で、哲学的で芸術的な性格は人生のいろいろな姿を含んでおり、智恵でみなぎっている。

それでは『徒然草』作品の中に含まれている豊富な智恵と兼好の深い人生観に観して考察して見ることにする。中世時代の文芸は一般に暗くて、ゆううつな人生観が基底をなしていた。しかし『徒然草』ではゆううつな姿は見られなく、また無常観を詳しく説明してはいるが厭世的で、悲観的な姿は少しもない。兼好は『徒然草』のいろいろな文章で表見したように急速に近づく死への自覚を悟らせようとする文章を何度も繰り返している。例えば「人はただ、無常の身にせまりぬるまじきなり。」[18] (第49段)〔人は、ただ、死がその身に追っていることをしっかりと心得で、わずかの間も忘れてはならないのである〕、また、「もし人事たりて、我が命,明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間, 何事をか頼み、何事をか営まん。我らが生ける今日の日,何ぞその時時節に異ならん。」[19] (第108段)〔もしある人が来てお前の生命は、明日なくなるに違いないと宣告したとしたら、その時は日の暮れるまで、何を頼み、何を骨折ってやろうとするか。我々の生きている今日という日は、明日死ぬといわれその時を待っている時とどこが違うだろうか。〕、また、「貪る事のやまざるは、命ををふる大事、今ここにきれりと、たしかにしらざればなり。」[20] (第134段)〔果てない欲望が起きる理由は、命が尽きる一大事、即ち死が目前にあるということをはっきり知らないからである。〕、また、「死期はついでをまたず。 死は前よりしも来たらず、 かねてうしろに追れり。人皆、死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来たる。」[21] (第155段)〔人間と死というものには順序がない。死は前方からやってくるとは限

18) 安良岡康, 徒然草全注釈上巻, 角川書店, 1991. P.227.
19) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.465.
20) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.556.
21) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.118.

らない。気つかぬうちに背後に追っているのである。人はだれでも、死というもののあることは知っているが、しかも死を予期することは今すぐとは思っていないのに、気づかぬうちに突如としてやってくる。〕このような例のすべては死がつかの間に来ることを人間に説いて分らせるためである。その上、死は常に急に「覚えずして」来るものである。しかしそれを「心にひしとかけて」考える人はあまりいない。死がいつかは来ることを人間であるならば自覚しない人はいない。けれども、そのことを切迫したものとして自覚する人もあまりない。自己の死を忘れている時にいろいろの不必要な時とかこのましくない形で不幸が発生すると人は死の自覚を「心にひしとかけて、つかのまも」 忘れられないようになるだろう。すなわち、死を考えるにつれて、貪欲と欲のために人に苦痛を与えたり、またその欲のために起因する多くの人生の不幸――それらが本当に遇かなものであることを人々が反省すればどんなに温かくて情深い世になるだろうかと反問している。

兼好はただ無常を嘆いているだけではなく、彼は死が来ることを冷厳な事実として自覚しているにもかかわらずゆううつな姿には少しも解れていない。彼は無常な人生を肯定すると同時に死も肯定している。

兼好の主な思想は“人間はどう考え、どう生きるべきか”と言う人生問題の大命題で始まったと彼は誰よりもまことに考えた。

無常な人生は、その自体が矛循である。それで彼は人生を生きながら絶望もしないで、詠嘆もしないで、濶達し、当々に生きて行こうと言った。それから、人生をより根源的に見ようとする人間的で情緒的な態度をもっている。また、彼の生活方法を見れば彼は山林の隠者から都市の中に出る市隠で、半僧半俗の生活をしたが、即ち 「沙弥」[22] の生活をした。 その上、彼は隠者で貪欲をきらう人であった。清貧し、倹素した生活をし、孤独を感じ、閑寂を得ようとした。このように彼の生活哲学を説明することができる。

彼は短い人生に抵抗しようとし、不満を持たない。人生に抵抗するとか、不満を感じるのはいたずらに人生に対して焦燥感を感じられるだけであると言う。彼はかえって短い人生というのは一層心の中のどこかに生きようと願う欲望が隠されていたと言った。

---

22) 一般的に官職を捨てどこでも巡りながら 生活をする人を言う。
僧侶でもなければ俗人でもない半面, 伴僧半俗の人である。

無常を悲しむのは「常住ならんことを思ひて変化の理」を知らないゆえであると述べている。そして、「つくづくと一年を暮す」と言って短い期間でも長いと思う人生を当然として、いくら長く生きても足らないと思う人においては結局「千年を過すとも、一夜の夢の心地」になるばかりと言った。このような表現は満足を知らない人の心を現わしたものである。彼は生死は人間が予測できないものであり、人生ははかないものと主張し、人生の短さを嘆き、人生を楽しもうとしない人は実は人生の貴重さも知らない人であると言った。このように人生の短さはどうしようもないということを知った時これを克服しょうとしたのが兼好の生き方の方法である。このように思う彼にとって人生を楽しく生きる方法はどんなものであるかという疑問が生じる。前述したように兼好は慾望をおさえ、欲もなく、欲ばるものもなく、生きようとする態度を持った。それが人間の理想像と思い、「よき人」の生活態度と考えた。また、別の例をあげると、「長くとも四十に足りぬ程にて死なんこそ、めやすかるべけれ」[23]（第7段）〔長くても、四十歳に満たないうちに死ぬようなのが、実に無難であろう。〕人生は充分に長いと言ったように兼好は短い人生に価値があると見て、死を結末づける有限な生にその眞味があると見たのである。また、兼好は人生を最初から肯定しているので、厭世的な言葉はあまりなく、人生は思いとおりできないのを克服して人生の意義を見出そうとした。このように「あはれ」を思うぞんぶんに享楽しようとした生活態度から彼の思想が理解できるし、無常を自覚しょうとした人生観がうかがわれる。また、彼は人間の知識だけでは解決できない人間の知識の限界を越える神祕の世界を肯定した。彼は人間の知識を理解すること、人間の能力の限界を理解することに人間の智恵があると言った。

彼は暗い中世時代の稀貴なこととか迷信を信じることを排撃し、いつも合理的な考え方を尊んだ。そして、人間の知識の限界、人間の能力の限界を自覚して人間の能力を越える神祕の世界を肯定し、有限な人生において生の方法として平安朝以後ずっと維持された。

そして、いっそう内面化された風雅な生活態度、すなわち「よき人」[24]の生活態度を讃美し、これに反する生活態度を排斥した兼好は彼の文章に多く引用された儒教・仏教・道徳的な知識で徹底的に、批判的に、自由な立場から書いた批評家で

23) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.42

24) 朝長ノり編著, 日本文学論集, 南榮文化社, 1984. P.205.

あったとも言える。また、「あはれ」と 「をかし」[25]を存分に享楽しようとした生活態度を見ても彼の思想を知ることができる。いわば兼好はすべての事実を自覚して、この自覚的無常観は彼の人生観の基をなしている。

3. 兼好の無常観

一般的に「無常」というのは仏家の思想から出だ言葉で、一定していなくはかないと言う意味で知られている。

しかし、「無常」は『方丈記』の作者の鴨長明が暮した中世の王朝時代であった貴族社会が没落した。そして源頼朝[26]が征夷大將軍に任命された1192年に武士階級の登場で公家社会が崩壊した。それで、混乱な社会に変わり、不安と焦燥な暗黒社会が継続した。

そのような時期に社会的には現世の無常と人生無常に現世否定的な「詠嘆的無常観」が出現した。また、諸行無常とか、仏教的無常観のような因果應報の思想が現われて、このような思想が当時に風靡した中世の無常観である。しかし、『徒然草」に現われた無常観は仏教的な無常観を根底にして、新しい思想が起った。長明が 「詠嘆的無常観」で人生訓、處世訓を含んだ「自覚的無常観」で思想的な発展を成した。即ち、「詠嘆的無常観」と言うのは恐怖の感情から出た感傷的な無常観を言うので「自覚的無常観」とは、このような「詠嘆的無常観」から外れて、外界の無常と自分の心の中に籠っている反應を中心として、無常の道理と変化の理致を悟ることを言う。それでは、変化の理致とは何かを説明すればそれは地上に存在するすべては変化し、流転し、消滅することを言う。[27]

兼好の無常観は仏教の無常観ではなく、生死の無常観である。それで彼は「無常」に対する観点として、死をおそれるのは変化の理致をよく知らないからであると思った。兼好が山林の中から都市の中に降りた重要な原因は彼の心の中にある無常観の変化にあったのではなかろうかと思う。

兼好の無常観は『徒然草』によく表現されているように『詠嘆的無常観』から自覚

---

25) 李榮九譯, 前掲書 P.34.

26) 源頼朝は 平氏家を滅亡させた鎌倉の第一代將軍

27) 赤根祥一, 無常の思想, れんが書房新社, 1980. P.161.

して無常な現世に対処されうる対処法で自覚的無常観を主張した。では、これから「詠嘆的無常観」と「自覚的無常観」に分けて考察したい。

(A) 詠嘆的無常観

詠嘆的無常観を簡単に説明すれば、無常の様相である世相のすべての変轉相を嘆く心像とか、恐怖の感情でこの世を無常と受けとめたことを「詠嘆的無常観」と言える。詳しい内容を次のように説明することができる。

(1) 万物は常に変化して流転しているという論理で人生変化流転を説明する。[28] 即ち、これは人生無常から出た現世否定の論理で説明された現世の無常を言う。例えば、「木の葉の落つるも、先ず落ちて、芽ぐむにはあらず……死期は序を待たず。……人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。」[29] (第155段)〔木の葉の落ちることも先に葉が落ちて、その後で芽が生ずるのではなくて、……人の死ぬ時は、順序を待たないで、突然やって来るものなのだ。……人間はみな、自分に死のあることがわかっていながら、それほどにも、死を待ち迎えることが切迫していない状態でいる時に、死は不意に到来るのだ。〕前の句節に現れた内容の通り木の葉が落ちる理致、即ち葉が落ちて芽ぐみ実がなる理致で万物は常に変化して流転するという理致と生死の理致を比喩した。また、季節の変化は順序があって、その時期を知ることができる。しかし、人間の死は順序がなくて、いつ死ぬかわからないところから始なる人生無常と現世無常を論ずる哲学的な表現である。

(2) 生は必死という必死の理致である死の無常を言い、日本の中世の無常観を言う。この世を「無常」と考える仏教思想と当時の暗鬱な世事の反映でできた現在は無意味で汚れて悪いと言う一種の厭世主義を言う。例えば、「人は、ただ、無常の、身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。さらば、などか、この世の濁りも簿く、仏道を勤むる心もまめやかならざらん。」[30] (第49段)〔人間というものは、ひたすら、無常、即ち死がわが身に近く迫ってしまっていることを心中にしっかりと保持して、わずかの間も忘れてはならないのである。こうした

28) 赤根祥一, 前掲書, P.161.
29) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.118.
30) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.227.

心がけでいるならば、どうして、この現世に執着する邪悪も簿くならないであろうか、また、仏道に精進努力する心持もまじめでないことがあろうか〕人間はただ、死を予じめ準備して仏道修行に専念せよとの内容である。兼好は生は必死という死の無常を受け入れた。また、俗世は邪悪なので仏教思想に専念せよとの内容である。

(3) 死の無常説は人間を戦慄と恐怖の中に追い込むのを言う。そして、無常とは世事のすべての変転する状態を感傷的に受け入れて、そのような点を歎息する心と恐怖の感情でこの世の無常を受け入れるのを意味する。例えば、「棺をひさく者、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。……これを余所に聞くと思へるは、いとはかなし。閑かなる山の奥、無常の敵競ひ来らざらんや。その、死にのぞめる事、軍の陣に進めるに同じ。」[31] (第137段) 〔遺骸を収める棺を売る者は、作ってそのままに置いておく間がない。年の若いのにも、体の強壮なのにも関係せずに、思いかけないのは、人間の死ぬ時である。…… 死の到来が予測できないことを自分に無関係なこととして聞くような気でいるのは、実に頼りないことだ。閑静な山の奥に、無常という敵が勢いこんでやって来ないであろうか。隠遁している人が死に直面していることは、ちょうど、武士が戦陣に進み出ているのと同じなのである。〕兼好は安全地帯と思う草庵を死と直面している戦場に比喩して、敵がいつ攻めて来るかわからない状況で、人間を戦慄と恐怖の中に追い込むのと同じく死がいつ来るかわからない緊迫な状況に表現している。また、棺をうち置く暇もないという意味は、即ち多くの死は人間を戦慄と恐怖の中に追い込んで、人間世上事のすべての変転相を感傷的に受け入れると言う意味で、これが即ち、詠嘆的無常観である。

(B) 自覚的無常観

自覚的無常観を間単に説明すれば、無情を自然の理致と同じもので自覚した「自覚的無常観」と言える。詳しい内容を次のように説明することができる。

(1) 虚像があると見ても実在は無である。即ち、諸行無常、盛者必衰等に対する仏教的無常観と因果応報の思想等を夢幻泡影観に見た。仏教的無常観を根底にして、これをもっと思想的に発展させたのである。 例えば、「生を貪り、利を求めて、

31) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.24.

止む時なし。……其する処、ただ、老と死とになり。」[32]（第74段）〔あくまで長生きしたいと願い、また、利益を求めて、とどまる時のないありさまである。……待ち受けるところは、ただ老いと死とだけである。〕いくら欲心を起しても、結局死だけと言う諸行無常と盛者必衰等を人間に知らせて悟るように努力している。

(2) 夢幻泡影観は反対に死の恐怖をすくなくする。それから生きていても死んでもたいした差異がないと見る無常観を言う。兼好は「無常」を人生の事実に認識してこれを理知的の眺めて、それに対する対処法を立てた。

例えば、「鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもののあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。」[33]（第7段）〔鳥部山の煙が立ち去らないでいるように、この世の中が、いつまでも住み通すきまりだけならば、どんなにか物の情趣もないことであろう。人間の命は定まっていないことこそ、妙味のあるものなのである。〕有限な人生を生活感情的次元で肯定し、制限された人生を人生らしく充実に生きてゆく條件と思った。死を恐れるとかこわがらないで、かえって当然だと受け入れる兼好の現実性を現わしている。

(3) 虚像の理致、僞りの理致、即ち、万物は真実に存在するのではなく、僞りに存在すると見る意味の無常を言う。

世の中のすべて「変化の理致」を事実に受け入れる人達が、知っていなければならない哲理だと思った。また、「無常」の道理を悟って無常自体を「自然界の理致」で收容した。それで、現世に対処することができる無常の対処法を立てた。例えば、「人間の大事、この三つには過ぎず。うえず、寒からず、風雨に侵されずして、閑かに過すを楽しびとす。ただし、人皆病あり。病に冒されぬれば、その愁しのび難し。医療を忘るべからず。」[34]（第123段）〔世の中の必要欠くべからざる大事なことは、この三つ以上には出ない。だから食物があって飢えず、衣服を着て寒さを感ぜず、家に住んで風や雨の害を受けず、心靜かに日々を過ごすのが、人間の楽しみなのである。ただし、人間には皆病気がある。病気にかかってしまうと、その苦しみは堪えがたいものである。したがって、病気の治療を忘れてはならない。〕これは兼好が死を目前にした者だけが感受される世界を悟っていることを見せている

32) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.327.
33) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.42.
34) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.519.

内容である。即ち、兼好の無常に関する緊迫な自覚を現わしたのである。兼好はその週辺で多くの人たちの死と、死境を迷よう姿を見たと想像される。言わば、無常の道理を悟って、無常自体を自然界の理致に収容した。

自覚的無常観と言うのは、先に説明した内容のように仏教的無常観を根底にして「無常」を人生の事実に認識して、変化の理致[35]を事実に受け入れた。それで人々が悟って無常自体を自然界の理致に収容した。即ち、自覚的無常観と言うのは無常の道理を悟って現世に対処しうる対処法を立て、事実に受け入れるのを言う。

4. 兼好の自然観

自然観という意味は自然に対する考えと見解を言うのである。ここでは兼好の自然に現れた美的感情要素を探索して考察したい。

(A) 自然の理致と美

『徒然草』の中で兼好は"万物は常に変化して流転する"という自然の理致は自然的無常観を基礎にして言っている。

自然の美しさは花が満開するとか満月の姿でも感じることができる。それから変りゆくすべての変化の中で 「あはれに情深い」[36]の情趣を感じることができる。散る落ち葉にも、自然の美しさを発見することができ、哀愁が籠った心の中にも「もののあはれ」を感じることができる。自然は、常にいうに及ばず美しいもので、そこに、「万物流転の理致」を悟ることができる。

『徒然草』で自然観を調べて見れば多くの句節に花と月の美的要素と、自然の理致を窺うことができる。「花は盛りに、月はくまなきをのみ、見るものかは。雨に対ひて月を恋ひ、たれこめて春の行へ知らぬも、なほ、あはれに情深い。」[37] (第137段)〔桜の花は、眞盛りに咲いているのだけを、月は、かばりもなく照り輝いているのだけを、見て賞美するものであろうか。降っている雨に向かって見えない月を心に慕い、すだれをたれて、その中に身をこもらせて、春の次第にふけてゆくの

35) 赤根祥一, 前掲書, P.162.
36) 赤根祥一, 前掲書, P.166.
37) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.13.

を知らずに過ごすのも、やっぱり、しみじみした感じがして、情趣が深いものだ。〕この部分は『徒然草』において自然観の表現を集約した句節だと言ってもよかろう。即ち、自然を代表する花（桜の花）と月（秋の月）は、日本の王朝文學で象徴的なもの[38]である。

また、美の根源と考えられており、兼好はまさにこの点を特に強調して美意識を添加した。「さかりの花」と「くまなき月」の句節は花と月を愛する兼好の素直な心情を現している。また、例をあげれば、「望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う青みたるやうにて」[39]（第137段）〔かげりもなく輝く満月を遙かに遠い天外にまで眺めているのよりも、明け方近くなって待っていてやっと出て来た月が、ことに情趣か深げに青みを帯びている様子であって〕十五夜のお月より待っていた下弦の月がもっと情趣かあるように人間は常に安楽な生活より勘忍した後に享受した光栄な生の姿をもっと尊貴に思う点を月の眺望姿勢で表現したということができる。

この外にも月に関するいくつかの例をあげると「つれづれとこもり居たるを、或人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに」[40]（第104段）〔つれづれと籠り居たるを、或人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに〕又、第137段で再び例をあげると「すべて月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやのうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。」[41]〔一般的にいって、月と花をば、そうむやみに目でばかり見るものであろうか。桜の咲く春は家を出て行かないでも、秋の月の出ている夜は寝間の中でも、心中に花と月とを思い描いているが、まことに確実に興趣ぜられるものだ。〕自然というのは必ず直接目で見なければその美しい情趣を味わうことができない。家でも部屋で寝る時でも満開のはなびらや皎々な十五夜のお月さまを想像して情趣を味わうことができる。また、別の例をあげると、「からは気うとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつつ見れば、ほどなく、そとばも苔むし、木の

38) 風巻景次郎, 中世の文学伝統, P.34.
39) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.15.
40) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.442.
41) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.17.

葉降り埋めて、夕べの嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。」[42]（第30段）〔死者の遺骸は、人気のない山の中に埋葬して、参るはずになっている日だけ、そこに時折お参りして見ると、間もなく、卒都婆にも苔がつき、まわりの木々の落葉が降って墳墓を蔽ってしまい、夕方の嵐、夜中の月ばかりが、わずかに、話しかけてくれる縁者であるというありさまなのだ。〕歳月が流れると行っても決して忘れない古人までもすぐわすれてしまう。ただ、遺骸だけ山中で嵐や月だけを友にして「さび」を感じさせ、人生無常を詠んでいる。今度は月影について調べて見よう。「月影に色あひさだかならねど、つややかなるかり衣に濃き指ぬき」[43]　（第44段）〔月の光のもとでは色彩がはっきりしないが、沢のある狩衣にこむらさきの指ぬきばかまという身なりて〕情趣ある或る山荘の秋の夜に月がおぼろにかすむ中に視覚、聴覚、觸覚を動員して推理鑑賞する句節であるが、実は仏事に参加する姿を表現したのである。

今度は月・花・風・水は対して調べて見よう。「ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそなほあはれなれ」……「山沢は遊びて、魚鳥を見れば、心楽しぶ」[44]（第21段）〔ある人が、「月ほど感興あるものはあるまい」と言ったところ、もうひとりが、「それより露の方が一層興趣があるものだ」……「山や湿地に遊んで、魚や鳥を見ていると、心が楽しくなる」〕兼好は自然を讃美し、月・露・風・清い水・山・湖水・魚・鳥等の自然の美しさと人間の心を慰め、憩う所は自然しかないことを強調している。兼好は自然の理致、即ち万物流転の理致は人間の生死だけにあるのではなく、栄枯盛衰の理致、即ち自然の中に流れる理致だと考えた。

（B）四季節の美

日本の文学作品を考察して見れば『古今和歌集』[45]の「春夏秋冬」し『枕草子』[46]の「春の曙、夏の夜、秋の夕暮、冬の早朝」が、四季節の季節感覚を表現した部分が記録されている。多くの文学作品にも見られるが、兼好は自然の美を表現する時、

42）安良岡康，前掲書 上巻，P.154.
43）安良岡康，前掲書 上巻，P.210.
44）安良岡康，前掲書 上巻，P.110.
45）紀貫之による日本最初の勅選和歌集 1,100首和歌集

特に四季節に対してたくさん書いている。このような影響は、歌人兼好が和歌の中でしばしば仕う内容を『徒然草』に仕わなかったかと類推することができる。それで、『徒然草』を広意の和歌的大随筆集ではなかろうかと思われる。

第19段を例にあげると、「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ。」[47]〔季節がつぎつぎに移り変わってゆくありさまは、何事につけても、しみじみとした興趣が感じられるものである。〕と言い、四季節の自然の美しさを兼好は優れた筆致で書いた。

まず、春を表現した句節を見ると「春のけしき」「鳥の声」「梅の匂ひにぞ」「かすみわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ」[48]〔一面に霞がかかるようになって、桜の花もしだいに咲き始めるころであるのに〕等で美しい情景が表現されている。

それから夏の句節は「六月のころ、あやしき家に、夕顔の白く見えて、かやりびふすぶるも、あはれなり。」[49]〔六月ごろ、賤しい家に、夕顔の花が白く咲いているのが見え、蚊やり火をいぶしているのも、情趣ふかいものだ。〕眞夏のひっそりしたいなかの風景を一幅の東洋画を見るように表現している。

また、秋の情景を見ると「雁鳴きてくるころ、萩の下葉色づくほど」[50]〔雁が鳴きながらやって来るころ、また萩の下葉が黄色に色づいて枯れてくるころ〕と言う句節に現われて、これは「あはれ」を感じる秋の風情を表現している。

又、冬の内容を例にあげると、「汀の草に紅葉の散り止りて、霜いと白うおける朝、やりみずより畑の立つこそをかしけれ。」[51]〔庭前の池の水ぎわの草に、紅葉が散ったままにひかかっていて、霜がたいそう白くおいている早朝、遣り水から水燕気が立っているのは、面白い趣である。〕これまで調べて見た第19段では春夏秋冬の情趣を、まるで画を見るように表現している。

また、別の段では春の例をあげれば「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、賤

---

46) 清少納言による中世の代表的な随筆文学作品中の一つである。
47) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.91.
48) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.91.
49) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.94.
50) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.96.
51) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.98.

しからぬ家の」[52]（第43段）〔晩春のころ、のどかでほのぼのと美しい空の下に、身分の賤しい人のものとは思えない家があって〕それから、第240段を見れば、「梅の花かうばしき夜のおぼろづきにたたずみ、御かきが原の露分け出でん有明の空も」[53]〔梅の花の匂いのよい夜の朧月の光の下に、恋人を求めてさまよい歩くことも、恋人の住むお邸の垣根のあたりの露を分けて外に出て帰ろうとする夜明けの空のけしきも〕と春を唄って、次に、夏に対して例をあげると「家の作りやうは、夏をむねとすべし。……暑き比わろき住居は、堪へ難き事なり。深き水は、涼しげなし。浅くて流れたる。はるかに涼し。」[54]（第55段）〔家の作り方は、夏に適することを主とするのがよい。……夏の暑いころ、住むのに不適当な住宅というものは、我慢できないものである。庭のやり水について言うと、底の深いのは涼しそうな所がない。浅くて流れている水が、ずっと涼しい感じである。〕があるが、この段では情景よりも人間生活の知恵を話している。つづいて、秋の例になる第44段を見ると、「心のままに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、虫の音かごとがましく、遺水の音のどやかなり。」[55]（第44段）〔思う存分に秋草の生い茂っている庭は、草葉に置きあまるほどの露に一面に蔽われていて、虫の声が恨みごとを言うように聞こえ、庭を流れている遺水の音が静かに落着いて聞える。〕秋の香りが匂うのを感じさせる。

最後に冬に対する例をあげると、「北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる事のながえも、霜いたくきらめきて、有明の月、さやかなれども、くまなくはあらぬに。」[56]（第105段）〔家の北側の陰に消えずに残っている雪がひどく凍りついている所に寄せて置いてある牛車の轅にも、霜がたいそう輝いていて、夜明けの空に残る月が、形ははっきりと見えるけれども、その面に雲りがないという程でもない〕等とか、また、外の例では、「二月十五日、月明き夜、うち更けて、千本の寺にまうでて、後より入りて、ひとり顔深く隠して聴聞し侍りしに」[57]（第238段）〔二月十五日，満月の明るい夜に、夜がふけてから、千本釈迦堂に

52) 安良岡康，前掲書 上巻，P.208.
53) 安良岡康，前掲書 下巻，P.538.
54) 安良岡康，前掲書 上巻，P.256.
55) 安良岡康，前掲書 上巻，P.213.
56) 安良岡康，前掲書 上巻，P.449.
57) 安良岡康，前掲書 下巻，P.521.

参詣して、大勢集まっている席の後部から入って、つれもなくひとりで、顔を頭巾でまぶかく隠して、お経の講義を伺いました折に〕では、寒い冬に、寺で説教を起こる姿を表現しながら、恋情を抱いたある女性の行動を直接見るような印象が受けられる。

また、別の例をあげると、「雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言うべき事りて、文をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返事に」[58]（第31段）〔雪が趣のあるさまに降っていた朝、ある人のもとへ、言ってやらなくてはならぬ用事があって、手紙をやろうとして、雪のことを何とも書かずにやった、その便りの返事に〕きれいな雪のような恋情の言葉も書けなかった純情の手紙を出したのではなかろうか、季節の美しさとともに人間の苦悩と恋情等煩悩も一緒に常在していると言うことを言っている。

このように兼好の自然観は絵を書いたように美しい情景の表現で現われている。それから、その中には苦悩があり、自然の中に流れる理致があった。われわれは兼好の『徒然草』で自然のはなやかな美よりも自然と一体になる「あはれ」と「をかし」を強く感じさせられる。

5. 和歌的な要素と文学思想

これから兼好が書いた『徒然草』の中に出る和歌的要素と文学思想を深って見たい。

兼好は一生涯二つの作品を残した一つは和歌集の『兼好家集』[59]で、もう一つは隨筆集の『徒然草』である。この二つの作品は構成と文体が全く異なる文学形態である。

この章で筆者は隨筆集の『徒然草』に現われる和歌的要素と文学思想を研究しようとする。それで、先ず『徒然草』に出る兼好の周囲環境と周辺人物を調査してその文学に及ぼす影響を調べて見た。

『徒然草』の第160段で『和歌四天王』の友達道我[60]の内容が出るが、その例をあ

58) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.163.
59) 『兼好法師自撰歌集』,『兼好法師集』などと 呼ばれている兼呼が創作した歌集である。
60) 兼呼の歌友, 法印権僧正, 二条派歌人として『和歌」にすぐれた歌人である。

げれば「「行法も、法の字を清みて言ふ、わろし、濁りて言ふ」と、清閑寺僧正仰せられき。」[61]〔「行法ということばも、法の字をホウと濁らないで言うのは、よくない。ボウと濁って言うのだ」と、清閑寺僧正がおっしゃった。〕で、ここで清閑寺僧正は道我を指称する。

また、友達に対する例をあげれば、「「羅の表紙は、疾く損ずるがわびしき」と人の言ひしに、頓阿[62]が 「羅は上下はつれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそ、いみじけれ」と申し侍りしこそ」[63]（第82段）〔「薄い織物を張った、草子や巻物の表紙はすぐに破損するのが困ることだ」とある人が言ったところ、頓阿が、「薄い織物の表紙は、上下の部分がすりきれて、布地がほつれ、螺鈿をちりばめてある巻物の軸は、その螺鈿の貝がとれてしまった後の方が、特に味わいが深い」と申しましたのには〕があるが、頓阿との対話内容を書いている。

それから、兼好は後宇多天皇に奉仕して弘安元年（1278）蔵人の頭で勤務した。その後伏見天皇と花園天皇の即位によって失隧したが大覚寺統の後二条皇帝即位とまた、文保2年（1318） 爲世が68世の時、後醍醐天皇[64]が即位して爲世が歌壇の長老として権勢をにぎる威勢が堂堂とした。その年文保2年2月花園天皇が退位して後醍醐天皇が新たに即位したが、その時の状況とありさまは『徒然草』の第27段に紹介されている。その例をあげれば、「御国ゆづりの節会行はれて、剱・じ；内侍所渡し奉らるるほどこそ、限りなう心ぼそけれ。新院の、おりいさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや。」[65]〔御譲位の節会を行なわせられて、剱・じ・内侍所の、三種の神器をお渡し申し上げになる折は、まことに、この上なく心さびしいことである。新院が、位をお退きになった、その年の春、次の上うなお歌をお詠みになったとか。〕と言う譲位する姿を見るように書いている。以上の内容は兼好の文学に影響を及ぼした関聯要素である。

それから、つづいて『徒然草』の中に出る和歌的な要素を深り、その文学思想を考察したい。『徒然草』が書かれたのは1319年に第一執筆をし、第二執筆は1330〜

---

61) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.137.
62) 兼呼の歌友で時宗の僧で, 正応2年(1289)〜応安5年(1373), 84才 死亡。
63) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.351.
64) 倉田康夫編, 前掲書 P.147.
65) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.139.

1331年まで兼好が49才～50才の年であり、総整理は1336年に書かれたと知られている。

『徒然草』は兼好が出家隠遁して戻った後書かれたのがまちがいない。彼は出家隠遁を終った後もっと活発に作家活動をした。それから、歌合や歌会に出席したことも確実だと推測されている。また、歌人兼好が世に知られた時『徒然草』を出刊した。ところが『徒然草』の中には歌人兼好の歌を一首も見つけられない。

特に第238段の「自讃の事七つ」にも兼好自身の和歌に関して称讃したのが一つもない。その内容を見れば、「御隨身近友が自讃とて、……自讃の事七つあり。……「時に当りて本歌を覚悟す。道の冥加なり、高運なり」」[66] 〔御隨身の近友の自讃といって……わたしにも自讃のことが七つある。……定家卿は、「そのご下問の時に際して、典拠となる和歌をおぼえていた。これは、目に見えない歌道の神のご加護であり、すばらしく運のよいことだ」〕と言っている。即ち、この内容を説明すれば後鳥羽院からの問いに論語の中の語句をすぐ即座で定家卿が答えを当てたのでそれが大なる幸運であったと言う内容である。

即ち、その当時二条歌人の兼好が和歌に対する関心を表現したことで彼の機知と想像力が分かることができる。

『徒然草』の中にはただ14段にだけ和歌と言える内容がすこし入っていると思われる。第14段を例にあげれば、「和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしのしづ・山がつのしわざも、言ひ出でつればおもしろく、おそろしき猪のししも、「ふす猪の床」と言へば、やさしくなりぬ。」[67] 〔和歌というものは、何といってもやはり、興趣の深いものである。身分の低い、下賤な者や山中に住む者の所業も、和歌の詞として言い表わしてしまうと、みなおもしろくなり。恐ろしい猪のししのことも、「臥す猪の床」と和歌に詠んでみると、優雅に感ぜられてしまうものである。〕

全段の内容を見ても主題や話題を見ても和歌に関したことである。しかし、和歌の一首、または一句を引用する等、和歌的内容が窺われる兼好の和歌は全たく見られない。

また、その当時の和歌は無常の中世で都市公家たちが唯一に心のよりところと言えるし、逃げ隠れる方法でもあった。もっとも当時人たちは和歌を通じて現世を

---

66) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.505.
67) 安良岡康, 前掲書 上巻, P.71.

忘れることもあった。また、死の追われるところからはじまる無常から逃がれることができた。

それで兼好も当代の人達とともに和歌に取り組んでも見た。しかし「和歌四天王」の歌人になった兼好は『徒然草』に歌論を書きたい気にならなかったであろう。その理由は彼が中世の歌人であるが、和歌に対して不安全な現実を悟ったからである。彼は和歌を通じて伝統の枠の中で隠れて生きている貴族たちを見た。その時、兼好自身は険しい中世に生きる人間であるのを悟って結局和歌と別れる。兼好と和歌の離別を現わす第137段を例にあげると、「雪には下り立ちて跡つけなど、万の物、よそながら見ることなし。」[68] 〔雪には、地面におりて行って足跡をつけたりなどして、あらゆる物を、そのものとして離れて眺めるということがないのである。〕と言う句節から「よそながら見ること」という句節では兼好自身に自責しながら和歌との“離別”[69]を話している。

今度は話歌的文学思想を調べて見よう。兼好は伝統の話歌と音楽に安全し、また、世と断切している公家貴族たちの「つれづれ」なる日々を送るのは念頭にして『徒然草』を書いたと言うことができる。言い換えればそのような現実に根底にし、兼好は『徒然草』を書いたであろう。即ち、『徒然草』は公家階級の貴族たちを読者にしょうとする意識で書かれたと言うことができる。

このような観点からこれまで『徒然草』の中の和歌的文学思想を考察して見た。しカし『徒然草』は兼好がすでに“和歌”と離別した後に書いた作品たったので彼が直接書いた和歌は出なくて、友達のいくつかの問答する文章と“和歌”の間接的な内容が14段を始めいくつかの所に現われただけである。

歌人として『徒然草』作品の中に和歌を書かなかったのは『徒然草』自体が広意の和歌的大随筆集と言うことができるためではないかと思う。

また、文章形態が違うとは言うが兼好が和歌との離別をした後たったので伝統の和歌の枠の中に生きている貴族たちにそのような事実を悟らせ、冷静な現実を知らせようとするところにあるのではないかと思う。

---

68) 安良岡康, 前掲書 下巻, P.18.

69) 久保田淳, 徒然草講座（第四巻）. P.162.

III. 結　論

これまで哲学者で思索家の兼好の『徒然草』を通じて当時の時代相と兼好の文学思想を観察することができた。

兼好が生きていた鎌倉時代は公家と武家の爭って武家の勝利によって貴族政治が崩れ、武家の幕府政治が成立した。それで京都の文化圏が一機に崩れ、社会の大「詠嘆的無常観」に対して兼好は世上の変転事を無常と受け入れた。それから、彼は「詠嘆的無常観」を対処法として「自覚的無常観」を成立した。“万物は常に変化し流転する”の無常観を根底にした兼好の自然観は「さび」の美意識を無限に発展させた。

それから「見ぬ花、見ぬ月」と言う心の中の美まで観照することができる美に対する自然観を確立した。

特に兼好は「和歌四天王」のといわれる程優れた歌人であるが、時代の流れにしたがい和歌がほとんどない隨筆集『徒然草』を書いた。それから、彼自身が考えたままその中に現われている和歌的な要素と文學思想を観察して見た。その内容に『徒然草』がより広義の和歌的大随筆集ではなかろうと思われる。

これまで考察した彼の思想は“人間はどう考え、どう生きるべきか”と言う大命題として人間の主なる思想に対するものとして彼がより人間の生を根本的に吟味して見た。

それから、これまで考察して見た『徒然草』は人間がどう生きるべきか[70]に対する眞のモラル(moral)や哲学を複雑な現代人にも悟らせる指針書になっている点を筆者は強調したい。

〈参考文献〉

• 安良岡康：徒然草全注釈上，下巻，角川書店，1991.
• 李榮九譯：日本文學概論，敎学研究社，1982.
• 赤根祥一：無常の思想，れんが書房神社，1980.
• 安良岡康：歌人としての兼好，国文学解釈と鑑常，至文堂，1957.
• 風巻景次郎：中世の文学伝統，岩波文庫，1985.
• 久保田淳：中世文学の世界，東京大学出版会，1972/
• 石川常彦：徒然草における和歌的なもの山　道,天理大国文学，1957.
• 風巻景次郎：中世和歌の世界，桜楓社，1980.
• 福田秀一：頓阿，特集国文学，学燈社，1971.
• 有精堂編集部：徒然草講座，有精堂，1983.
• 倉田康夫編：日本史要說，敎学研究史，1981.
• 林 瑞 栄：兼好発掘，筑摩書房，1983.
• 小原幹雄：爲世と爲兼，特集国文学，学燈社，1967.
• 富倉德次郎：日本古典鑑賞講座(徒然草,方文起)，角川書店，1972.
• 杉浦清志：兼好の出家と和歌，日本国会図書館，1982.
• 川瀨一馬：徒然草校主，構談社，1985.
• 三木紀人：方文記・徒然草，尚学図書，1980.
• 桜井好郎：中世日本人の思惟と表現，未来社，1970.
• 久保田淳：研究資料日本古典文学，明治書院，1979.
• 小沢良衛：歌人としての兼好の徒然草,日本文学研究会，1983.
• 守屋毅：日本中世への視座，日本放送出版協会，1985.
• 小出　光：徒然草，旺文社，1984.
• 永藤靖：中世日本文学と時間意識，未来社，1984.
• 細谷直樹：兼好と歌集と徒然草原始林，札幌原始林社，1969.
• 川瀨一馬：吉田兼好古典3、徒然草，講談社，1984.
• 神田秀夫外校注：方文記・徒然草，小学舘，1981.
• 三好行雄：日本文学社辞典，有精堂，1979.
• 久保田淳：徒然草 講座（第四巻）
• 西尾實：方文記，徒然草，岩波書店，1982.
• 久保田淳：徒然草必携，学燈社，1981.
• 斉藤彰：徒然草の和歌的基盤(上）学　苑，1984.
• 和歌史研究会：私家集大成 第5巻中世(3)，明治書院，1983.
• 日本辭典刊行会：日本国語大辞典，小学編，1981.
• 風巻景次郎：家司兼好の社会圏，日本文学研究資料叢書.
• 唐木順三：中世の文学，筑摩書房，1955.
• 朝長ノり：日本文學論集，南榮文化社，1984.
• 西田正好：無常の文学，塙新書，1975.
• 市古貞次：日本文学全史(3）中世，学燈社，1982.

69020

• 福田秀一：中世文学論考, 明治書院, 1975.
• 田 辺 爵：古典評釋, 徒然草, 右文書院, 1986.
• 日本文學研究資料刊行会：日本文學料叢書(方文記, 徒然草), 有精堂, 1975.
• 藤原正義：中世作家の思想と方法, 風間書房, 1981.
• 唐木順三：無常, 筑摩書房, 1985.

KOREA MARITIME UNIVERSITY 1945 한국해양대학교